

さばいてはいけません

ジェイコブ・プラッシュ

『兄弟たち。互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟の悪口を言い、自分の兄弟をさばく者は、律法の悪口を言い、律法をさばいているのです。あなたが、もし律法をさばくなら、律法を守る者ではなくて、さばく者です。』(ヤコブ 4 章 11 節)

お互いに悪口を言い、自分の兄弟の悪口を言っではなりません。兄弟をさばいてはいけません。それがこの箇所言っていることでしょうか？同じ章の 4 節を見ましょう。

『貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。』(ヤコブ 4 章 4 節)

貞操のない人たち！

自分の兄弟をさばいてはいけません！

少し離れた段落に、この使徒は同じ筆によって同じような口調で「さばいてはいけません」と書いていながら、この世的な教会を「貞操のない(姦淫を犯す)」と呼んでいました。

霊的な姦淫

ヤコブの手紙は新約聖書の中で最も古い本でしょう。シナゴグでの指導者の制度を引き合いに出したり、聖書へのいざない方を見ると、それがユダヤ人クリスチャンへ向けて書かれたものであることは明らかです。

ヤコブは売春や密通に関してヘブライ的な考えを用いています。イスラエルが偶像礼拝に陥ったとき、神はいつもそれを“姦淫”と呼んでいました。偶像礼拝は霊的な姦淫と等しいのです。

教会がキリストの花嫁であること以上に、イスラエルは神の妻であるべき存在でした。とすると、教会が不信仰であることはイスラエルが不信仰であったのと同じようなことなのです。偶像礼拝は“姦淫”と呼ばれます。その言葉はヘブライ的な文化の中でとても辛らつな言葉であり、ユダヤ人にとってとても聞くには堪えない概念なのです。

彼らの実によって

『同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです。』(マタイ 7 章 17 節-20 節)

イエスはその人の結ぶ実によってさばくことができると言いました。しかし同じ章で『さばいてはいけません。さばかれたいからです。』(マタイ 7 章 1 節)と書かれています。

最初に「さばいてはいけません。さばかれたいからです」と言われましたが、また「あなたは彼らの結ぶ実によって見分けることができる」と言いました。トロントやペンシコーラ（偽のリバイバルが起きた場所の名）に関わっていた人たちは、「トロントやペンシコーラを見たら、そこに良い実があるのが分かるでしょう」と言います。

イエスは、実によってその“現象”が正しいか分かるとは言いませんでした。彼が言われたのは、実によってその人が正しいか分かるということなのです。

それにもまして、現象を実によって判断できるとしても、それが御霊の実でなかったことは明らかです。御霊の実は自制であり、酔うことや狂気ではありません。

矛盾？

『うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。』(ヨハネ 7 章 24 節)

イエスは先に『さばいてはいけません。さばかれないためです』と言われたのに、「正しいさばきをしなさい」とも言われました。

ヤコブは矛盾に陥っているようです。またイエスも矛盾に陥っているようです。イエスはそれをするなど言われたのに、その仕方を教えているからです。ヤコブも「してはいけない」と言いながら、その直後にそうしているのです。

『ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行なっているからです。』(ローマ 2 章 1 節)

『ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。』(1 コリント 4 章 5 節)

『それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。』(ローマ 14 章 10 節)

『私のほうでは、からだはそこにいなくても心はそこにおり、現にそこにいるのと同じように、そのような行ないをした者（ここで問題になっているのは父の妻と近親相姦の関係に陥った者です）を主イエスの御名によってすでにさばきました。』(1 コリント 5 章 3 節)

繰り返しパウロは「さばくな」と言いながら、彼自身さばきを下していました。

イエスも「さばくな」と言いながらそれをしなさいと言い、どのようにするかも教えました。

ヤコブも「さばくな」と言いながら、さばきました。

この矛盾はどのようにして解けるのでしょうか？

さばき主なる神

神があることを聖書の中で間違っているとされていて、それを行っている個人や

教会があるなら、彼らをさばくのは私たちではなく神の言葉です。

ヘブライ語の“ヨシャパテ”という名は“ヤハウエはさばかれた”という意味です。私やあなたがさばくものではありません。私たちは単純にそれを認め、「これが神の言われることである」と言うのみなのです。

ヤコブがこの世的な教会を「貞操のない」と呼んでいたのではなく、神の言葉が、この世に浸っている教会を貞操のないものだと呼びました。

義母と姦淫の関係に陥っている男に対して、パウロがそれを正しくないと言っていたのではなく、神の言葉がその人を正しくないと言っているのです。

神があることをはっきりと正しくないと言ったとき、あなたや私がさばくのではなく、神がさばいておられるのです。

これが「正しいさばきをする」ということであり、正しくさばきをするということは、自分の考えではなく神のさばきに従ってさばくということです。

しかし、ここで大きな問題に突き当たります。私が個人的にしないことであっても、ある人にとっては必ずしも間違っていないということがあるのです。

人々の意見

ある信者が結婚式後にディスコに行った例を知っています。（私ならトラクトを配ることをする以外にディスコには入りませんが）私はそこに行くことに関して平安を持っていないので行きません。しかし、ここで自分の抱えている懸念や感覚を大げさに表すことはしません。

またアイルランドのあるクリスチャンの結婚式において、ダンスをする人もいました。そこで他の人たちは腹を立てたように叫んで「お前は背教者だ」と言い、結婚式を怒って飛び出し、大騒ぎを演じたのだそうです。そのことは教会を分裂させました。これが人のさばきということの例です。

“ラオデキヤ”という単語は“人々の意見、人々のさばき”というギリシア語と関連しています。私たちは他の人をさばく権利はどこにもありません。しかし、一旦神があることを正しいとか間違っているとされたのなら、さばくのは私たちでは

ありません。

アナクリノ(Anakrino)ー見分けること

ギリシア語で“さばく”という単語は“クリノ(krino)”といいます。

そのクリノに接頭辞の“アナ(ana)”という語を付けると、『自分はだれによってもわきまえ(anakrino)られません』(1コリント2章15節)という箇所の単語の意味を持ちます。

神は御言葉の中で、私たちに“アナクリノ”するように命じています。それは権利でも特権でもなく、そうするのが望ましいというものでもありません。私たちはそうするよう命じられているのです。そしてもし、あなたが物事を見分けることをしなければ、知恵に欠けているのです。

なので、偽りの教師たちがハンク・ハングラーフ(Hank Hangraaff)やデーブ・ハント(Dave Hunt)のような人と公に議論しないのには理由があります。

立ち上がって「それは聖書的でない」「間違っている」「それは神から出たものではない」と言う者は知恵を実際に用いているのです。

マイケル・ブラウン(Michael Brown)がペンシコーラをめぐる討論で退席し、ジム・マコーネル(Jim McConnell)が英ユ同祖論についての討論で身を引いたのも彼らが知恵に欠けていたからです。

知恵を実際に用いる者はだれによってもさばかれることはありません。なぜなら彼らは“アナクリノ”するからです。そして自分自身は“アナクリノ”されません。そのため他の者はそのような人たちを恐れます。

ディアクリノ(Diakrino)ー仲裁すること

『私はあなたがたをはずかしめるためにこう言っているのです。いったい、あなたがたの中には、兄弟の間の争いを仲裁する(diakrino)ことのできるような賢い者が、ひとりもないのですか。』(1コリント6章5節)

クリノの意味を変化させるもうひとつの接頭辞は“ディア(dia)”です。“ディアク

リノ”とは“判決を下す（仲裁する）”という意味です。

正しいのか、間違っているのか？道徳的にその行動は正しいのか？聖書的なのか？それとも非聖書的なのか？または、神から出たことなのか？それとも肉の思いからか、悪魔からなのか？

パウロを通して語られた聖霊は私たちに“ディアクリノ”するように命じています。

私たちは“ディアクリノ”することを許されているのではなく、またそうするように勧められているのでも、そうすることが特権である訳でもありません。私たちは“ディアクリノ”するように命じられているのです。さばくことが受け入れられることではなく、むしろさばきに失敗することが受け入れられないことなのです。

裁判をしてはならない

約二ヶ月ほど前、ある夫婦がとても悩みながら私たちに連絡をくれました。彼らの4歳の娘が教会にいる14歳の男の子にひどい性的ないたづらをされたそうです。その男の子とは何年前から同じ教会に通っていて、彼は名ばかりのクリスチャンでした。

女の子は精神的にひどいショックを受けていました。その子が絵を描いてくれたのですが、それを見た時、私は何があったのかをすぐさま悟りました。

実際、私は世俗の心理学を好みません。私は聖書的な心理学を信じており、心理学自体も信じています。聖書的な心理学とは箴言に基づいた心理学です。

人がどのように振る舞い、行動し、どのように考えるかを知りたいければ箴言を読んでもください。箴言は社会学にも心理学にも最適な書と言えるでしょう。

人の作った心理学であったとしても、それが聖書の心理学に基づいている限り、私は賛同します。しかし、世俗の心理学は神がないという前提に立っており、人間もただ二次元的な存在（体と魂）だと考えています。私にとって気がかりなことは、あまりにも多くの福音派が世俗や通俗の心理学にのめり込んでしまっていることです。

その女の子は家の絵を描きました。その家の中には四つの窓とひとつのドアがありました。家の中に描かれていたのはすべて女性であり、男性はそこにはいませんでした。

また、彼女は自分自身を家の外に描きました。しかし、その絵の女の子には骨盤は無く、恥部もありませんでした。

小児精神科医によると、このようなものは性的に虐待された子どもによくある絵の特徴なのだそうです。

これくらいの年齢の子は言葉で表すことの出来ないことを、絵に描いて表現します。そこには男性はおらず、彼女自身の腰の辺りも描かれてありませんでした。

その子の両親は、「私たちは何をしたら良いのか分からないのです。バプテスト派の教会に通っていますが、その 14 歳の男の子がクリスチャンということで牧師は何もアドバイスをしてくれず、また 1 コリントの手紙によると、このことについて世俗の権威にゆだねることも出来ないのでしょうか。その男の子の両親は、私の娘が心に傷を負ったのに警察にも裁判所にも行ってはならないと言い、娘は途方に暮れているのです」と言いました。

民法 / 刑法

1 コリント 6 章はローマ法を引き合いに出しています。（イギリスやオーストラリア、アメリカの法学の制度はローマ法をその原型としています）1 コリント 6 章は民法について語っているのであって、刑法についてはありません。この箇所は民法の下に誰かを訴えることであって、刑法については触れていません。

1 コリント 5 章において、不品行な者に関して語られています。

『私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で（名ばかりのクリスチャンのすべて）、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。

外部の人たちをさばく(krino)ことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばく(krino)べき者は、内部の人たちではありませんか。』（1 コリント

5章 11節-12節)

私たちは教会の中の不品行を犯した者をさばくべきです。そのような人と関わりさえ持たないほうが良いのです。このように、6章は刑法に関してではなく、民法について書いてあります。

あの14歳の男の子は刑法によって処理されるべきだったのです。彼の身元はその年齢のために法廷では保護されていたことでしょう。

その14歳という年齢で何か対処されていなかったなら、彼が18歳にもなるときにはその人生は崩壊しているでしょう。その末路は小児愛者の施設に行きになっていたことでしょう。

それでも、この14歳の子にはチャンスがありました。その人自身のために、彼は当局に渡されているべきでした。そうすれば少女も正義が行使されるのを見ることができたのです。

このようなことを教会がただちに対処しなければ、この人が年を重ねるとどうなってしまうのでしょうか。

そのままでは被害者は生涯心に傷を負い続けたままなのです。成長したときにその人の性の認識にも大きな影響を及ぼします。しかしながら、その教会は聖書から正しい答えを与えることさえ出来なかったのです！

(それがバプテスト派の牧師で良かったのかもしれませんが。彼は聖書的な答えを提供することが出来ませんでした。もしそれがペンテコステ派の牧師なら、その女の子の中から悪霊を追い出そうとしたかもしれません！)

私は友達の妻で、クリスチャンの小児精神科医をしている人にこのことを話し、手元にあった絵を見せました。二人とも私とその夫婦にしたアドバイスに同意していました。そしてその夫婦はあの問題を犯罪として警察に届け出たのです。

しかし、そのとき他の人たちは何と言っていたと思いますか？「さばいてはいけない」「クリスチャンの人を訴えるなんて。クリスチャンをさばいてはいけない」と言っていました。

一体どうしたらこのようなことが言えるのでしょうか？子どもを性的虐待にさらすことを促進しているようです。

教会が神の言葉から離れるとこのようなことが起こってしまいます。

私たちは“ディアクリノ”することを許されているのではなく、“ディアクリノ”するように命じられているのです。しかし、それは人に関してのことだけではありません。

預言を吟味する（さばく）

『預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味(diakrino)しなさい。』（1コリント 14 章 29 節）

『ただし、わたしが告げよと命じていないことを、不遜にもわたしの名によって告げたり、あるいは、ほかの神々の名によって告げたりする預言者があるなら、その預言者は死ななければならない。』

あなたが心の中で、「私たちは、主が言われたのでないことばを、どうして見分けることができようか」と言うような場合は、預言者が主の名によって語っても、

そのことが起こらず、実現しないなら、それは主が語られたことばではない。

その預言者が不遜にもそれを語ったのである。彼を恐れてはならない。』（申命記 18 章 20 節－22 節）

エレミヤ 14 章と 28 章も同じことを告げています。イエスは終わりの日に多くのにせ預言者が出てくると警告しました。

私たちはそのような者を石打ちにして殺すことはしませんが、その罪は同じように深刻なのです。彼らは悔い改めなければ滅びます。

私たちは律法の下にいないのではなく、恵みの下にいます。しかし、そのような者の“奉仕”は石打ちにされるべきものです。1コリント 14 章 29 節では、私たちは預言者や預言を“ディアクリノ”する権利があるというだけではなく、それを吟味（さばく）ように命令されているのです。

このことから言っ、ロドニー・ハワード・ブラウン(Rodney Howard Browne)はにせ預言者です。またジョン・ウィンバー(John Wimber)やリック・ジョイナー(Rick Joyner)、ポール・ケイン(Paul Cain)もにせ預言者です。

とはいっても、これは私のさばきではありません。私は誰も“クリノ”することは出来ないからです。神が言われた言葉が物事を“クリノ”するのです。私は“アナクリノ”しなければなりません。これは神から出たことなのか、人からのものなのかを見分けるということです。

その通り、私にはさばく権利がありません。私は“ディアクリノ”しなければなりません。つまり、聖書の基準に照らし合わせて、それが道徳的に正しいか正しくないかの判決を下すことです。

モルモン教というカルトと、エホバの証人の創始者たちはにせ預言者です。彼らは起こりもしないことを告げました。ポルトガルに住むファティマ出身のローマ・カトリック修道女ルシア(Lucia)はにせ預言者です。彼女は起こりもしないことを告げたのです。ジョン・ウィンバーやリック・ジョイナー（またジョン・キルパトリック、ミカエル・ブラウン、ジェラルド・コーツ）らもにせ預言者です。起こりもしないことを告げたからです。

私ができるように言う権利はあるのでしょうか？違うのです。これは権利ではなく、私には言わなければならない責任があり、天におられる私の神が命じているのです。これは私のさばきではありません。この人たちについて神が言われていることなのです。

イエスは「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずですよ」と言いました。あなたが“ディアクリノ”しそこなうなら、イエスの戒めを守っていないのです。“ディアクリノ”していないなら、そのような人たちは人々に、自分の肉の思いやまたはサタンからの“ことば”を与え続けるのです。

正しくさばく

『またそのとき、私はあなたがたのさばきつかさたちに命じて言った。「あなたがたの身内の者たちの間の事をよく聞きなさい。ある人と身内の者たちとの間、また在留異国人との間を正しくさばきなさい。』(申命記 1 章 16 節)

これは勧めではなく、命令です。

この世で現代に起こっていることを見てください。すべての人が自分が“被害者”だと自称しています。

もし、お酒を飲みすぎて、通りをバイクでかなりのスピード出して、小さな子をひいてしまったとしても、その人は不運な家庭環境にいたからだと言われます。何があっても“被害者”なのです。

この間、私はある売春婦に話し掛けました。彼女は「こうするのは父親が首を吊ってしまったからだ」と言い、それが言い訳でした。「私も劣悪な環境で育った」と言い、「あなたはちょうど今、同じ境遇にいる妹がいて、大学に通っていると言ったではありませんか。彼女はあなたのしていることをぶざまだとは思わないのですか？彼女も被害者なのではないでしょうか？」と私は聞きました。社会ではもはや誰も自分の行動に責任を持とうとしません。しかし、教会が神の基準に従って歩んでいないとき、どうして社会に対して同じようにしろと言えるのでしょうか。

私自身劣悪な環境で育ちました。父親は酒飲みで、私も 16 歳のころにはもう薬物中毒でした。イエスさまが私の人生に介入してくれなかったなら、何があったとしても、今頃には死んでいたか、人生を崩壊させていたかどちらかであったであろうと思います。

イエスさまがいたからこそ、私は大学に通い結婚をすることなどの恩恵にあずかせてもらっています。

私は自分の力に頼っていれば、何にも値しない者でした。とはいえ、私は自分の生涯と自分の選択に責任を負っていたことは確かです。

塩と光

もし、教会が神の基準という責任を掲げないなら、どうして我々の社会が違ったものになることを期待できるのでしょうか。

もし、私たちが神の基準を掲げなければ、神に背を向けた社会に対して、私たちがどうして塩となり光となることができましょう。

犯罪があっても何も驚くことではありません！我々の社会が道徳的・社会的に後退してきている主な原因は救われていない人にあるのではなく、なまぬるい教会にあるのです。

クリシス(Krisis)－天か地獄か

私たちがしてはならないさばきがあります。ギリシア語では“クリシス(krisis)”です。

『また、父はだれをもさばかず、すべてのさばき(krisis)を子にゆだねられました。』(ヨハネ 5 章 22 節)

最終的に誰が天国に行くか地獄に行くかという判断は主おひとりに委ねられています。私たちは決して“クリシス”してはいけません。それは禁じられています。

クリテス(Krites)－万民の審判者

『また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者(krites)である神、全うされた義人たちの霊』(ヘブル 12 章 23 節)

神は万民の審判者です。さばくように召されている人もいますが、最終的なさばき主は神です。

ヒューポクリテス(Hupo Krites)－パリサイ人

教会の中で何か間違ったことがあり、立ち上がってそれを人の前に明らかにするとき、自分自身も同じことに関して咎が無いかを注意しておくべきです。それが私たちのすべきではないもう一つのさばきです。

“クリテス”に接頭辞“ヒューポ(hupo)”を付けると、英語では“ヒポクレイト(hypocrites)=偽善者”という言葉になります。

これはイエスが『さばいてはいけません。さばかれたいからです』(マタイ 7 章 1 節)と言われたことの意味です。自分の量りであなたも量り返されるのです。

『また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。

兄弟に向かって、『あなたの目のちりを取らせてください』などどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。

偽善者(hypokrites)よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。』(マタイ7章3節-5節)

私たちは“クリテス”をしません。特に“ヒューポクリテス”はもつてのほかです。

クリティコス(Kritikos)ー判別する

『神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別する(kritikos)ことができます。』(ヘブル4章12節)

赤血球と呼ばれる細胞は、大腿骨や脛骨など太い骨の赤色骨髄の中に蓄えられています。外側には骨があつて、内側には骨髄があります。しかし、ある部分は顕微鏡をもってしても、どこまでが骨でどこから骨髄かがはっきりしません。

たましいと霊の関係がちょうどそれと同じようであると聖書は言います。預言を考えてみても、それがただ誰かの想像なのか、その人を通して神の霊が語っているのか、違いを判別することは非常に難しいことです。

人は三次元の生き物です。たましいから体を離すことはできます。しかし、どこまでがたましいでどこから霊なのかは容易には分かりません。

「主がこれを示された」とか「神が告げられた」と誰かが言うとき、それが想像の産物なのか、神の霊が語っているのか区別するのは特に難しいことです。知性は良いしもべですが、危険な主人です。多くの人は悪霊によるものではなく、自分の心から出たむなしいことを預言しています。

私たちは“クリティコス”するよう召されています——何がたましいによるもので何が霊によるものかを判別するのです。神のことばは、骨と骨髄を分けるように、霊的な人とたましい的な人を区別する力を与えます。

要約

「さばいてはいけません」聖書はどのように言っているのでしょうか？

1. 私たちは自分の意見でさばいてはいけません
2. 私たちは“アナクリノ”するよう命じられており、いつでも物事を見分けるべきです：「これは神から出たものなのか？それとも肉の思いまたは悪魔からか？」
3. 私たちは“ディアクリノ”するように命じられており、道徳的に正しいか正しくないかの判決を下すべきです
4. 私たちは“クリシス”することをしません—主おひとりが誰が天に上り、誰が地獄に下るかを決めます
5. 私たちはときには“クリテス”するよう召されています—主が万民の審判者であることを忘れずに、正しくさばくべきです
6. 私たちは何があっても“ヒューポクリテス”してはいけません—兄弟の目からちりを取ろうとするときに、自分の目にも同じちりが入っていないかを確認すべきです
7. 私たちは絶えず“クリティコス”するべきです—たましいからのものと霊からのものを識別するため神のことばに頼るべきです